

調	査
報	告

架橋離島と小規模離島のいま③

山口県下関市の島々（蓋井島篇）

本誌編集部

SNSで市況などの情報共有

人のうち、漁協の正組合員は二三人、準組合員は一三人と、漁業従事者の割合が高い。

漁協の自営事業である定置網漁ではアジ、サバ、カツオ、コシナガマグロが獲れ、午前二時半頃に揚げられる。出荷業務で雇用している固定の一名と、当番で担当するもう一名の二人で、

一六年前にUターンし、令和二年四月から山口県漁協蓋井島支店長を務める松本武範さん（四二歳）によると、島の年間水揚量は七三〇〇から七四〇〇万円ほどで、冬はサワラ、三月から六月は建網でサザエや底物（オコゼやヒラメ）、夏季は素潜りでア

本州最西端の自治体として知られる山口県下関市には、離島振興法指定離島である六連島（七二人、令和二年国勢調査）と蓋井島（八四人）、対本土架橋によって法指定を解除された角島（六五〇人）の有人三島が所在する。これらの島々の現況について、前号から引き続き紹介する。

下関市西部の響灘に位置する蓋井島へは、山陰本線の吉見駅より徒歩数分の吉見港から市営の連絡船で所要時間四〇分。四月から九月は一日三往復、一〇月から三月は二往復で就航している。本号では産業や教育を中心に蓋井島の現在を報告する（現状は令和五年七月の調査時）。

「磯焼け対策として、近年は実入りの悪いムラサキウニやガンガゼを駆除している。ホンダワラは多く生えている」

蓋井島の実人口七四





水揚げされたサザエを計量記録する松本武範さん(右)。

漁協が所有する鮮魚運搬船に個人出荷分もまとめて五〇分かけて北九州の小倉市場へ搬送、五時の競りに間に合わせる。小倉市場で捌ききれなかった分は下関市場に卸すなどしている。定置網漁での出荷額は二五〇〇から二六〇〇万円ほど。



スマートフォンでLINEを確認する西昭男さん。

令和四年からは東京海洋大学の学生が来島し、コシナガマグロの種苗生産について研究、将来的にはコシナガマグロに希少なクロマグロを産ませることを目指す試みが進められているという。また、蓋井島の対岸にある水産大学校も藻場調査を実施しており、その

結果を養殖に役立てようとしている。

山口県漁協蓋井島支店の運営委員長を務める西昭男蓋井島自治会長(六五歳)によると、漁業の後継者不足が深刻だという。島で一番の若手は三三歳のUターン漁師で、他の若者は本土側に就職している。前述の定置網漁の乗組員も、二、三年前までは一〇人以上いたが、令和五年は四人にまで減少。引き揚げには七人必要であるため、六五歳以上の人たちにも頼んでいる。本土から乗組員を募集したいが、固定給を出せる確証がない。

「漁協所有の燃料タンクは令和四年まで使われていたが、更新には一〇〇〇万円ほど必要。漁船も二〇隻ほどに減った」

海産物をより高い値段で取引するための工夫もされている。島の全世帯がSNSのLINEを使い、自治会や漁協をはじめ、潜水漁業者だけで構成される磯組合といった単位で、それぞれ

LINEグループを作っている。草刈りや巡回診療といった日常的な連絡事項から、アワビやサザエの出漁や出荷、市場別の市況（キロ単価）などが松本支店長を中心に情報発信され、個人で出荷先を決められるようになった。特に黒アワビは下関の唐戸市場で高価で取引され、五〇〇グラム以上の物であれば一キロ当たり二万六〇〇〇円以上の値がつくこともあるという。

「サワラを個人の希望で競りのある火曜と金曜に唐戸市場で卸すなど、柔軟に運ぶこともある。サワラは一〇月から三月頃に一本釣りで獲るが、ここ二、三年で漁獲量が減少している」。定置網漁の副船長を務める向橋豊和さん（四九歳）によると、七月から九月末までの間は土曜を除く九時から一五時まで、保護区を除く島の周囲で潜り漁が営まれる。また、下関市吉母で購入したアワビやアカウニ、佐賀県から購入したバフンウニの種苗放流やアラメ

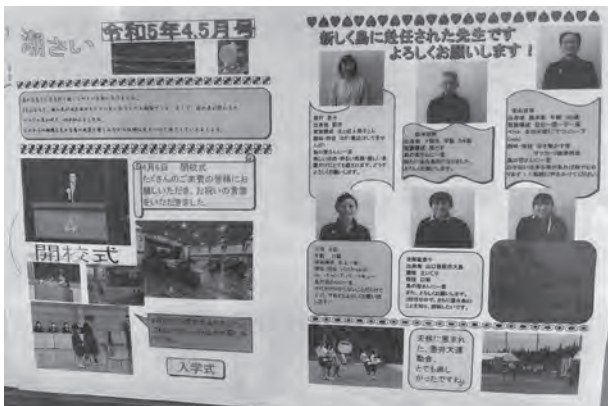
の母藻設置では、三二〇万円程度の交付金を活用しているとのことだ。

「潮さい倶楽部」の活動

漁協職員だった大空富士枝さん（六三歳）にもお話をうかがった。大空さんは令和三年四月から「潮さい倶楽部」（平成一〇年に漁協女性部から改称）の部長を務め、いま六人の新聞係で蓋井島の広報紙「潮さい」を隔月で発行している。同倶楽部には一四人のスタッフが所属。新聞係のほか浜掃除を先導する環境係、婦人防火クラブの運営や小型消防ポンプの練習、高齢者の避難を促す防災係など、島全体の暮らしを支えている。

「漁協のおもな業務はバフンウニの加工事業で、瓶に詰めて出荷している。令和五年はウニが例年の半分ほどしか採れず、注文に生産が追いつかなかった」。二月から四月は芽ヒジキを製品化する

る。共同で採ったものを均等に分けて天日で干し、釜で炊いて干してごみ取りしパッケージ化する。蓋井島の芽ヒジキは柔らかさが特徴で、個人や島内の商店「みなと屋」で販売している。



「潮さい倶楽部」が隔月で発行する広報紙「潮さい」。

小中一貫教育校が新設

令和五年四月、既存の蓋井小学校に蓋井中学校を新設し、施設一体型の小中一貫教育校である蓋井小中学校が開校した。小学校は一年生一人、三年生二人、五年生一人で、三・五年が複式学級、中学校は一年生一人で、全校生徒は計五人。先述の武範さんの息子兄弟を含む二世帯の子どもたちが通っている。

当校の藤井潔校長（五〇歳）は同四年度に小学校の校長として赴任、五年度から新設中学校の校長となり小学校校長も兼任することとなった。藤井校長はバリの日本人学校に勤務した経験も持つ。

「島だと必要な物がすぐに入手できないこともあるが、バリも同じような環境だった。ある物で工夫する点が共通している」

以前は、吉見港のそばに市が運営す

る「青雲寮」があり、蓋井島の中高生はそこから本土の学校に通学していたが、利用する生徒がいなくなつて平成二四年三月に閉鎖された。その後、再開の要望もあったが、施設が老朽化し、人材確保や運営コストの面からも見送られ、解体の準備が進められている。なかには、大規模校で競争させたいという保護者の意向から、寄宿舎のある学校などに進学する生徒もいるが、蓋井小中学校の開設には小中、中高一貫校教育の潮流も背景にあるようだ。先述の西自治会長によると、青雲寮が休止している間、島の中高生は母親と本土側で暮らし、島に父親のみ残る世帯もあった。ご自身の子ども三人も、高校と大学の数年間、母親と市内のアパートで生活していたという。

「五〇年ほど前、自分が子どもの頃は同級生が二〇人以上おり、青雲寮は一〇人以上が入寮、図書室や保健室も使って満杯だった」

小中学校は校長をはじめ、授業も受け持つ教頭、教諭は小学校二名、中学校三名、養護一名、給食調理員の計九名で運営される。教科担任が不足しているのも、中には複数教科を受け持つ教諭もいる。また、英語や道徳のリポート授業や、不足している教科担任を本土の学校から招く、週に一度は吉見中学校の生徒と交流するなど、教育格差が生じないよう工夫している、と藤井校長は語る。

「島の方々は子どもを近い距離で大事に育ててくれるが、そればかりだと免疫がつかない。鍛える部分と手厚くする部分をともに大事にし、本土側の学校と交流もする。市内の小学生が島まで遊びに来ることもある」

冬場の定期船の就航率や運航時刻を考えても、蓋井島で「離島通学」のようない取り組みは難しい。一方、小中合同でトマトやナス、オクラ、タマネギ、カボチャ、ズッキーニを育てて収穫し、

島の人にも買ってもらうなど、独特の総合学習も実施している。

オイル用のエミュー飼育

蓋井島では平成一四年より、皮下脂



平成14年からエミューを飼育する中村 求さん。

肪からオイルを精製して販売するため
にエミューを飼育している。エミュー
はダチョウに似た鳥類で、成鳥は二メ
ートル近い大きさになる。

前蓋井島自治会長であり、蓋井島地
域おこしエミュー飼育部会長である中
村求さん(七一歳)によると、近親交配
を防ぐため、かつては網走のエミュー
農家と卵を交換しており、最盛期には
二〇〇〓三〇〇頭を飼育していた。現
在は二二頭になっており、今後増やす
予定はないという。

「餌はトウモロコシが主だが、ウクラ
イナ戦争の影響で倍の値段になってい
る。餌やりは週一、二回で済み、寒暖
の変化にも強いので、つねに屋外に出
しておける」

中村さんと漁協職員など五人で飼育
を始めたが、現在は三人に。中村さん
の息子など若者が中心となって製油作
業をしている。エミューオイルは現在
口コミで販売。注文は来ているものの、

商品の在庫が慢性的に不足している。

また、六、七年前からツバキ油の製
品化に向けた開発が進められている。
搾油機の導入などは山口県からの補助
金を活用した。

専業漁師である中村さんは、近年、ア
ラメやカジメが台風で流され、高級品
の赤ウニが採れなくなり、南方系のア
ラ(タエ)が増えたと、海洋環境の変化
についても語る。

島唯一の商店「みなと屋」

松本武範さんの父・明さん(七七歳)
は二三年前から港近くで商店「みなと
屋」を経営している。以前は漁協が専
任者を雇って経営していたが、売り上
げが芳しくなく一時閉店。時を同じく
して、漁協の参事だった明さんは市内
の六漁協合併に合わせて退職、店を漁
協から賃貸で引き継ぐこととなった。

「みなと屋」は自身の屋号から命名、朝

六時から午後五時半まで正月の二日間を除き年中無休で営業している。「〈夜の灯台、昼のみなと屋〉と呼ばれるくらい島に根づいている」と明さんは話す。

商品の仕入れは「潮さい倶楽部」前部長でもある妻の眞由美さん（七〇歳）が担当。生ものは火曜と金曜、小倉から鮮魚運搬船で仕入れ、雑貨など日持ちする日用品は漁船で入荷する。注文はファックスで、商品の七割は山口県漁協本店購買部から仕入れ、船までの積み込みは業者に依頼する。

明さんはプロパン（高圧ガス）や毒物、危険物の取扱資格、酒販免許を所持しており、島での売買を一手に担っている。車と船外機で使うガソリンと冬期に利用する灯油も販売しており、毎月二回二〇〇リットルのドラム缶を二本、計八〇〇リットルを定期船で搬入している。

蓋井島では六年に一度、三日間かけて山神に奉仕する国選択無形民俗文化

財「山ノ神神事」が執り行なわれる（詳細は本誌二二三号、二三四号参照）。松本家も四軒ある山神を奉る当元家（神事の世話をする家）の一軒だが、令和六年の神事は規模を縮小して実施予定だという。「松本家が当元となる〈二の山〉は、他の山に比べて人手が少ない。開催を三日から一日にする、ツクリモノ（飾り物）をなくす、一の山に他の三軒が合流するなど対策を考えなければならぬ状態です」

かつてはベビースラッシュで賑わい、平成一〇年には小学生だけで二三人を数えていたが、その後の人口減少や環境変化により主産業や神事が縮小傾向にある蓋井島。一方で、LINEで効率的に情報を共有して漁業者の収益向上などに役立てる、新設された小中一貫教育校で他校とリモート授業を行なうなど、ICTを駆使した試みもはじまっている。また、令和四年からは市

内の民間病院による週一、二回の巡回診療も開始され、処方薬も受診の翌日には定期船で届くようになった。島々を取り巻く現状が刻々と変わりゆく中で、蓋井島の取り組みは一つの先行例になるのではないか。（次号につづく）

（奥村・三木）



「みなと屋」では特産品のヒジキも販売。